

逢坂冬馬

『同志少女よ、敵を撃て』（早川書房）

913. 6/Ai

- ◆ソ連で猟師の母のもとに生まれた少女・セラフィマ。ある日、村をドイツ軍が襲い、村民を皆殺しにする。母は狙撃手に討たれて死に、自分も死を覚悟したところ、赤軍の女性兵士イリーナに救われる。「戦いたいのか、死にたいのか」—そう問われた彼女は、女性狙撃手となる道を選んだ。母を撃ったドイツ人狙撃手と、母の遺体を焼き払ったイリーナに復讐するために……。おびただしい死の果てに、彼女が目にした“真の敵”とは？

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 狙撃シーンの緊迫感は凄まじく、読みごたえのある作品です。

(堀内清香)

- ◆第二次世界大戦の独ソ戦を舞台に、主人公セラフィマを中心とする様々な境遇の少女たちがソ連の狙撃兵として戦う物語。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 人を殺せば殺すほど讃えられる戦争の中でセラフィマたちが本当の味方、敵は誰なのか、何のために戦っているのかについて苦悩しながらも自分の中の正義を貫き通す姿が様々な視点から描かれている点。

(居場穂乃嘉)

相沢沙呼

『medium（メディウム）：霊媒探偵城塚翡翠』（講談社）913. 6/ア

- ◆推理小説家の香月史郎は、心に傷を負った城塚翡翠と出会う。彼女は、死者の声を拾い死者の言葉を伝えることが出来る霊媒少女。香月は、城塚の霊視と論理の力を組み合わせ、事件に立ち向かう。一方、巷では、姿なき連続殺人鬼が人々を脅かしていた……。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 本当に「すべてが伏線」です。特に最終章は面白すぎてページをめくる手が止まらないです。

(高相満里奈)

青山美智子

『木曜日にはココアを』（宝島社）

913. 6/ア

- ◆川沿いの桜並木のそばに佇む喫茶店「マーブル・カフェ」。そのカフェで出された一杯のココアから始まる、東京とシドニーをつなぐ12色のストーリー。卵焼きを作る、ココアを頼む、ネイルを落とし忘れる……。小さな出来事がつながって、最後はひとりの命を救う。あなたの心も救われるやさしい物語。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 短編集なので読みやすく、朝の読書の時間にも最適です。一つひとつの話が少しずつ繋がっていて、人と人との繋がりも感じることができます。忙しい時にこそ読みたい、優しくて心があたたまるといえる小説です。読み終わったあとは喫茶店でココアを飲みたくなります。

(塚尾真帆)

あさのあつこ
『バッテリー』（角川書店）

913. 6/ア/1

- ◆主人公・原田巧は岡山県の新田市に引っ越してきた。ピッチャーとして自信と才能を持つ彼はキャッチャーである永倉豪と出会う。そんな二人のバッテリーとしての人生の物語が始まる。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 対照的な性格であるが、いや、だからこそ野球を通して惹かれていく二人の友情が熱くてとても面白いです。思春期の心情や、繊細な心の動きは共感できるものがあるのではないのでしょうか。比較的読みやすいのでぜひ読んでみてください。

（加藤優月）

阿部智里
『烏に単は似合わない』（文藝春秋）

913. 6/ア/1

- ◆人間の代わりに「八咫烏」の一族が支配する世界で、世継ぎである若宮の後選びが始まろうとしていた。朝廷での権力争いに激しくしのぎを削る四家の大貴族から差し遣わされた四人の娘君は、世継ぎの座を巡る陰謀から若君への恋心まで様々な思惑を胸に後の座を競い合うが、肝心の若宮は一向に現れず、次々に事件が起こる。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 ラストが衝撃的。

（上西萌加）

- ◆舞台は八咫烏（やたがらす）が支配する世界。次の帝の正妻の座をかけて、四人の姫君が戦います。花とゆめと豪華絢爛な世界で起こる異世界ファンタジー小説です。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 タイトルと装丁から、想像していた異世界ファンタジーとは全く異なるラストで驚きました。本作は、松本清張賞を受賞している作品です。ミステリー好きの方、宮中小説が好きな方には特に読んでほしいです。

（小林真依）

- ◆人間の代わりに八咫烏の一族が支配する世界「山内」での話。春夏秋冬を司るかのような四家の大貴族から差し出された姫君が宮廷へ登殿し、若宮の後選びに奮闘するファンタジー小説。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 ミステリー要素もあり、表現がとても豊かで読んでいてとても楽しいところがおすすめです。結末がなかなか読めず、おもしろい展開になっていて最後までわくわくする話です。一作完結ですがシリーズ作品でもあり、次巻の伏線が張られていたりするので、2回目を読むとまた違った物語の雰囲気を感じられます。

（西河知咲）

有川 浩
『植物図鑑』（幻冬舎）

913. 6/ア

- ◆よかったら俺を拾ってくれませんかー。思わず拾ってしまったイケメンは、家事万能の植物オタクで、風変わりな同居生活が始まった。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 高校生が読むのにちょうどいい恋愛小説です。ハッピーエンドや恋愛系の話が好きな人におすすめです。

（森下莉帆）

有川 浩
『図書館戦争』（角川書店）

913. 6/ア/1

◆本を守るために武力を使う世界。不器用でまっすぐな防衛員、笠原郁の成長を描いた物語。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 本を守るために武力を行使するという設定と主人公・笠原郁の行動に周囲がツッコむという構図が面白いのでオススメです。

（小野田万由）

有川 浩
『阪急電車』（幻冬舎）

913. 6/ア

◆電車から始まるたくさんの物語。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 とても優しい気持ちになれる。

（西口友莉奈）

池上 彰
『そうだったのか！現代史 パート2』（集英社） 209. 75/イ/2

◆アメリカになぜイラク攻撃を強行したのか、北朝鮮は何を望んでいるのか、パレスチナはどこに向かうのか。世界はめまぐるしく変動し、混迷をきわめている。そして私達、日本人も無関係ではいられない。その世界情勢を理解するには、少し前の出来事を知る必要がある。9. 11以降、世界が注目する国や地域の現代史を取りあげた、大好評、池上彰の『そうだったのか！現代史』のシリーズ文庫化第2弾！

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 現代史が分かりやすくまとまっていて、かつ、細かく章に分けられているから、自分の興味のある事知から読んでもよし。「おもしろいとためになる」が一緒になった本です。受験に限らず現代史の知識をたくさん持つておくことは、知識の引き出しが増え、人としても豊かになれるので、私自身、もっと早く読んでいたらよかったと思った本です。

（古町美優）

伊坂幸太郎
『チルドレン』（講談社）

913. 6/イ

◆「俺たちは奇跡を起こすんだ」独自の正義感を持ち、いつも周囲を自分のペースに引き込むが、なぜか憎めない男、陣内。彼を中心にして起こる不思議な事件の数々。何気ない日常に起こった五つの物語が一つになったとき、予想もしない奇跡が降り注ぐ。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 短編集を読んでいるような気分になるのに、場面と場面が繋がる瞬間に、大きな一つの物語だと感じることもできる、面白い作品です。

（坪本紗佳）

伊坂幸太郎
『グラスホッパー』 (角川書店)

913. 6/イ

◆妻の復讐を目論む元教師「鈴木」、自殺専門の殺し屋「鯨」、ナイフ使いの天才「蟬」。3人の思いがある事件をきっかけに交錯していく。疾走感溢れる筆致でつづられた、分類不能の「殺し屋」小説。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 接点のない3人がだんだんと近づいていく様子が面白い。テンポが良く読みやすいので朝の読書時間におすすめです。

(石堂愛子)

伊坂幸太郎
『死神の精度』 (文藝春秋)

913. 6/イ

◆人間の死に可否の判断を下す死神。そんな死神が、ある6人の人間と出会います。6人がこれまでどのような人生を歩んできたのか、そして「可」の判断が下されてしまうのか。読み始めたら止まらない短編ストーリーです。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 みなさんが思い浮かべる死神の姿は恐ろしいものかもしれませんが、この本での死神は人間の姿。読み進めていくうちに、もしかしたら自分の身の周りにもいるかもしれないと思える程、死神に親近感が湧いてきます。6人の人間と死神の会話劇もとても絶妙で飽きません。最後には点と点がつながる場面も登場するのでぜひ読んでみて下さい。

(笠原百花)

伊坂幸太郎
『マリアビートル』 (角川書店)

913. 6/イ

◆酒浸りの元殺し屋「木村」。狡猾な中学生「王子」。腕利きの二人組「蜜柑」「檸檬」。運が悪い殺し屋「天道虫」。物騒な奴らを乗せた新幹線が疾走する。

【自分が読んだ学年】 中2

【お勧めの点】 最後までハラハラさせられる、全く予想のつかない作品でした。ハリウッドで『ブレット・トレイン』という映画名で映画化しました。伊坂幸太郎さんの作品はどれも本当に面白いのでおすすめです。

(赤松幸音)

今村昌弘
『屍人荘の殺人』 (東京創元社)

913. 6/イ

◆神紅大学ミステリ愛好会の葉村譲と明智恭介は、日くつきの映研の夏合宿に参加する。しかし、想像だになかった事態に見舞われ、一同は籠城を余儀なくされた。緊張と混乱の夜が明け、連続殺人が幕開けする。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 非現実的な物語で展開がよめないので、最後まで楽しめる。

(下村真未)

色川武大
『狂人日記』 (講談社)

913. 6/イ

◆主人公は自らを狂人であると卑下し、正常への渴望を諦めながらも、心の奥底では求めながら、幻覚や辛い現実と直面します。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 魯迅でもゴーゴリでもない「狂人日記」。色川さんの底知れぬやさしさに救われます。

(金田莉央)

上橋菜穂子
『獣の奏者』 (講談社)

913. 6/ウ/1

◆闘蛇村に暮らす少女エリンの幸せな日々は、闘蛇を死なせた罪に問われた母との別れを境に一転する。死地を逃れたエリンは、母と同じ獣ノ医術師を目指す。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 逆境を乗り越えて行く一人の少女エリンの人生を追うことで、力と勇気をくれる。

(佐野円毬)

上橋菜穂子
『鹿の王』 (KADOKAWA)

913. 6/ウ/1

◆戦に敗れ、炭鉱で塩を採る奴隷として働かされていたヴァンらの炭鉱に、狼が襲ってくる。鎖につながれ、抵抗できずに噛みつかれたヴァン達炭鉱員は、なすすべもなく、殺されてしまう。しかし、ヴァンのみが一人生き残りー。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 炭鉱から脱出したヴァンは、狼の襲来から生き残っていた、赤子のユナを見つけます。ヴァンはユナと共に、自分の生きる意味は何なのか、ユナとどう生きていくのかという苦しみの中で、様々な人と出会い、意志を固くしていきます。また、上橋さんの作品は、どれもそうなのですが、やはり「食」の描写が素晴らしいです!! 読んでいるうちに「食べたいな」と思わせてくれる作品です。

(田中美羽)

雨穴
『変な家』 (飛鳥新社)

913. 6/Uke

◆知人が購入を検討している都内の中古一軒家。開放的で明るい内装の、ごくありふれた物件に思えたが、間取り図に「謎の空間」が存在していた。間取りの謎をたどった先に見たものとは・・・。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 ラストに謎が残ったまま終わったところが、より不気味でホラー小説として良いと思います。

(平野あやめ)

宇山佳佑
『桜のような僕の恋人』（集英社）

913. 6/ウ

- ◆美容師の美咲に恋した晴人。彼女に認められたい一心で一度は諦めたカメラマンの夢を再び目指すことに。そんな晴人に美咲も惹かれ、やがて二人は恋人同士になる。しかし、美咲は人の何十倍もの早さで年老いる難病を発症してしまったのだった。老婆になっていく姿を晴人にだけは見せたくないと悩む美咲は…。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 命のはかなさ・大切さと同時に一日一日を大切に生きようと感じました。

（大西柊子）

- ◆一流美容師を目指す美咲と、写真家という夢を諦めかけていた晴人のラブストーリー。晴人は美咲と一緒にいることによって、夢をもう一度追いかけることに決め、二人の仲は順調に見えたが、そんな中、美咲は早老症という病にかかり…。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 よくある恋愛小説だと思って読み始めたものの、登場人物の心情描写や、話の進み方がリアルで、思わず感情移入してしまい、あまりの切なさに号泣しました。大切な人を想う気持ちが、痛いほどしみました。泣きたいときにどうぞ。

（角谷咲幸）

宇山佳佑
『この恋は世界でいちばん美しい雨』（集英社）

913. 6/ウ

- ◆駆け出しの建築家・誠と、カフェで働く日菜。雨がきっかけで恋に落ちた二人は鎌倉の海辺の街で愛にあふれた同棲生活を送っていた。しかし、ある雨の日、バイク事故で瀕死の重傷を負ってしまう。目を覚ました彼らの前に、“案内人”を名乗る喪服姿の男女が現れる。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 とても美しく、切ない恋、雨で最後までずっと涙が止まりません。いつも降る雨も、この本を読むと美しく見え、大切な人とどう時間を過ごすか、改めて考えさせる本です。一度読み始めたら本当に止められなくなると思います。

（富士原佳子）

岡嶋裕史

『メタバースとは何か：ネット上の「もう一つの世界」』（光文社）007. 35/オ

- ◆フェイスブックはなぜ社名を「メタ（Meta）」に変えたのか、話題の「メタバース」の基礎から未来の可能性までを語る。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 近年「メタバース」という言葉が、よく話題に挙がるが、「よく分からない」と感じている人がほとんどだろう。私達の生活で身近なSNSやゲームの話を通して、理解を深められ、また、今後の可能性を自ら考えるきっかけとなる本です。

（濱崎 柚）

小川洋子
『博士の愛した数式』 (新潮社)

913.6/才

- ◆「ぼくの記憶は80分しかもたない」博士の背広の袖には、そう書かれた古びたメモが留められていた—記憶を失った博士にとって、私は常に“新しい”家政婦。博士は“初対面”の私に、靴のサイズや誕生日を尋ねた。数学が博士の言葉だった。やがて私の10歳の息子が加わり、ぎこちない日々は驚きと歓びに満ちたものに変わった。あまりに悲しく温かい、奇跡の愛の物語。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 交通事故による脳の損傷で記憶が80分しかもたない「博士」と彼の新しい家政婦である「私」とその息子「ルート」の心のふれあいを、美しい数式と共に描いた作品です。数学に苦手意識がある人におすすめです。

(向井絵美梨)

- ◆記憶力は80分。記憶を失った博士は家政婦とその息子と共に幸福で切ない日々を送っていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 記憶のない博士と、博士にとっていつも“新しい”家政婦そしてその息子の三人の関係が、読み終わるころには大切なものになります。歓びに満ちて温かいけれど、どこか切ないところがおすすめです。

(本田乃愛)

- ◆家政婦の職に就くシングルマザーの杏子は、記憶障がいを持つ天才数学博士の元に派遣される。博士とのコミュニケーションの中で、杏子は数学の美しさに魅かれていく、そのうち杏子の息子が来るようになると、博士は彼を√（ルート）と呼んで可愛がり、成長を見守っていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 タイトルには数学が入っていますが、数学が嫌いな方でも読める本です。途中で出てくる数式は解説付きです。博士と杏子、そして√（ルート）の過ごした温かくも静かな日々の物語です。ラストでちょっとうるっと来ます。読んでください。

(山崎響子)

恩田 陸
『木洩れ日に泳ぐ魚』 (祥伝社)

913.6/才

- ◆舞台はアパートの1室。別々の道を歩くことが決まった男女が最後の夜を徹し、語り合う。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 登場人物2人の中で語り手が何度も移り変わるので、読者の立場でも気持ちがどんどん変わっていく点。

(田中香鈴)

垣谷美雨
『定年オヤジ改造計画』 (祥伝社)

913.6/力

- ◆長年勤めた会社を定年退職した常雄は、妻・十志子が自分と距離を置こうとすることに気付く。すると娘・里美から、十志子は“夫源病”だと言われる。そんな中、常雄は息子の和弘から、孫の面倒を見るよう頼まれる。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 ザ・昭和な常雄なので、「最初はよくそんなことを言えるな」と読んでいて腹が立つのですが、本人は何も間違っていないと思っているのが、リアルで面白いです。お話が進んでいくうちに、改心していく常雄が途中から好きになります。

(新谷瑛子)

加藤シゲアキ
『オルタネート』 (新潮社)

913. 6/Kato

◆高校生限定のSNSアプリ「オルタネート」が流行する時代。3人の主人公が出会いや別れ、悩みや葛藤を経て成長していく 青春群像劇。

【自分が読んだ学年】

【お勧めの点】 境遇が全く違う、私たちと同世代の3人が夢に向かって努力する姿に感動し、まるで自分自身も登場人物であるかのように物語の世界に引きずりこまれ、時間を忘れて読みすすめることができる点。

(佐藤加菜)

加納朋子
『ななつのこ』 (東京創元社)

913. 6/カ

◆短大生の入江駒子は『ななつのこ』という本に出逢い、ファンレターを書こうと思い立つ。こうして始まった駒子と作家のやりとりが、鮮やかにミステリを描き出す。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 身の回りで起きたささいな事件が、「あやめさん」に爽快に解決されていくとともに、心がほっこりする本です。

(圓尾咲歩)

川上弘美
『神様』 (中央公論新社)

913. 6/Kawa

◆四季折々に現れる不思議な「生き物」たちとうららで切ない九つの物語。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 気軽に読める短編集なので気軽に読めます。関連のない短編集かと思いきや一貫して輪郭のない主人公が存在し、周りの人々やくま、河童、人魚と交流していくので不思議な世界観で、そこに癒される作品が集められています。

(辰馬理予)

川口 晴
『犬と私の10の約束』 (文藝春秋)

913. 6/カ

◆12歳の女の子、あかりの家にやってきたゴールデンレトリバーの「ソックス」。母が急死した時も、悲しみを癒してくれたのはソックスでした。しかし、あかりが恋をし、将来の夢に夢中になるにつれ、ソックスの存在を邪魔に思い、イラ立ちを覚えるように・・・。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 犬を飼っている人も、飼っていない人も、一度は読んで欲しい本です。2008年に映画にもなっていて、読むのがめんどくさい、という人はぜひそちらを観てほしいです。犬の健気さに胸をうたれ、私たちが忘れかけている大切な心を思い出させてくれる本です。

(岳山ひなた)

川村元気
『億男』 (文藝春秋)

913. 6/Kawa

- ◆主人公である一男は、ひょんなことから譲られた福引券を引くことになり、景品は宝くじで、なんとそれは3億円が当選していた。一夜にして億万長者となった一男はどうすることもできず、友人の九十九（つくも）に相談する。話をしながら食事を楽しみ、酒に潰れた一男が目を覚ますと、その3億円が・・・。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 日々の生活において必要な「お金」をテーマに、お金と幸せの関係性について大切なことに気づかせてくれます。お金さえあれば、幸せは手にはいるのか？人生に必要なものは何なのかを問われ、それを深く考えさせられます。

(田中望園)

貴志祐介
『天使の囁き』 (角川書店)

913. 6/キ

- ◆アマゾンの探検から日本に戻ってきた人々が次々に変死していく。その原因をアマゾンの探検に行った一人の男の彼女が突き止め、脅威に立ち向かっていく物語。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 最初から最後まで飽きることなく、ずっと面白いです。読み進めていくにつれホラーやグロテスクな要素が深まり、現実で本当に起こってしまうのではないかとこの怖さがあります。

(稲富 杏)

岸見一郎, 古賀史 健
『嫌われる勇気』 (ダイヤモンド社)

146. 1/K

- ◆アドラー心理学について哲学者と青年の会話を対話形式で書いている本。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 人の目を気にしすぎたり、自分より他人を優先してしまうという悩みが解決される。他人の人生ではなく自分の人生を歩むための術が書いてある。

(宮本真鈴)

- ◆どうすれば人は幸せに生きることができるのかという問いに対する答えを提示する。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 承認欲求

(牧野杏咲)

- ◆「心理学の三大巨頭」と称されるアドラーの思想を、物語形式を用いてまとめた一冊。「どうすれば人は幸せに生きることができるか」という哲学的な問いに、きわめてシンプルかつ具体的な答えを提示する。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 対人関係で悩んでいる人に。嫌われる勇気は、幸せになる勇気と同じ。

(末吉秋子)

喜多川 泰
『手紙屋』 (ディスカヴァー・トゥエンティワン)

159/K/1

- ◆大学4年生になった西山諒太はある日、手紙屋という広告を見つけ、就職活動をしながら手紙屋と10通の手紙を交換し、成長していくストーリーです。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 「夢を叶えるために、才能は必要ない」就活生に向けた本ではありますが、進路に迷う高校生にもぜひ読んでみてほしいです。

(森 瑞希)

衣笠彰梧

『ようこそ実力至上主義の教室へ』 (KADOKAWA)

所蔵なし

◆物語の舞台は進学・就職率ともにほぼ100%といわれる名門校。しかしそこは完全実力主義の高校であり、進路が約束されるのは最も成績の良い1クラスのみだった。主人公綾小路はクラスメイト堀北と協力し、最も成績の良いクラスを目指すのだが・・・。

【自分が読んだ学年】 中2

【お勧めの点】 一癖、二癖もあるキャラクターたちが魅力的で面白い。「この世は不平等である」という、誰しもが気付いていることをどうひっくり返すのか、わくわくしながら読める。

(小路法花)

喜友名トト

『どうか、彼女が死にますように』 (KADOKAWA)

所蔵なし

◆これは、世界一感動的な、僕が人殺しになるまでの物語。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 読みやすく分かりやすい作品を好む人におすすめです。タイトルがとにかく最高です。美しい物語で、感動しました。

(長澤衣里子)

櫛木理宇

『死刑にいたる病』 (早川書房)

913. 6/ク

◆ある大学生が連続殺人鬼から「唯一の冤罪」の証明を託される。戸惑いつつ調査する主人公が辿りついた驚愕の真実とは？俊英が描く鮮烈なミステリー。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 冤罪だと主張する一つの事件に関する調査によって殺人鬼の人生、主人公との関係が少しずつ明らかになる中で、だんだんと殺人鬼に魅せられていく主人公。最後の最後までスリル満点の作品です。

(栗原彩矢音)

小坂流加

『余命10年』 (文芸社)

913. 6/コ

◆20歳の時に数万人に一人という不治の病にかかり、自らの余命が10年であることを知った少女。避けられない死を静かに受け入れるため、もう恋はしないと誓っていた。しかしある日、同窓会で再会したかつての同級生の男に思いがけず心惹かれていく。やがて、会うべきではない思いながらも、彼との距離が縮まることに喜びを感じていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 部活動や勉強などで悩むことも多い時期にこの本を読むことで、悩むことができるということも幸せだと感じられる。

(平田明日咲)

【自分が読んだ学年】 中3

【お勧めの点】 もう悟ったように生きていこうとする主人公ですが、「死にたくない」と最後の方でお母さんに抱きつくところがあります。余命10年というのは長いのか短いのか、命というのがすごく儚く尊いものなのだと気づかされる作品です。自分が今生きていることの奇跡を改めて実感でき、そしてたのしくも辛い恋をつい感情移入して読んでしまうと思います。

(小村文夏)

- ◆20歳の茉莉は、数万人に一人という不治の病にかかり、余命が10年であることを知る。笑顔でいなければ周りが追いつめられる。何かをはじめても志半ばで諦めなくてはならない。未来に対する諦めから死への恐怖は薄れ、淡々とした日々を過ごしていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 主人公の苛立ちや葛藤、恐怖といった心情描写がとてもリアルで、読みすすめていくにつれて話の内容にどんどん引き込まれていってしまうような作品であることが印象的。

(山下凜々香)

小杉健治 『父からの手紙』 (光文社)

913. 6/コ

- ◆家族を捨て、阿久津伸吉は失踪した。だが残された子供、麻美子と伸吾の元には誕生日ごとに父から手紙が届いた。10年後、婚約している麻美子を次々と不幸が襲う。婚約者が死体で見つかり、弟が容疑者として逮捕された。直面した危機に、父の真実が明かされていく…。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 家族を想う父の気持ちが伝わってきます。幸せな家族が周りにいることがどれだけ幸せか考えさせられます。最後は涙なしでは読めません。

(清水咲里)

斎藤幸平 『人新世の「資本論」』 (集英社)

331. 6/サ

- ◆人類の活動が地球に悪影響を与える時代である「人新世」の問題を、どう克服するかを斎藤幸平さんがマルクスの考えを再解釈した視点から述べた。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 現代の環境問題や経済的問題について、学んだり、新たな視点を得ることができるので、受験でも役に立つと思います。興味のある方はぜひ読んで下さい。

(岩本小夏)

椎野直弥 『僕は上手にしゃべれない』 (ポプラ社)

913. 8/S

- ◆小学校の頃から吃音に悩んできた主人公・柏崎悠太は、中学入学式の日、自己紹介のプレッシャーに耐えられず、教室から逃げ出してしまう。なんとかしたい思いから、「誰でも上手に声が出せるようになります」という部活動勧誘チラシの言葉にひかれ、放送部に入部する。途中くじけながらも少しずつ変わっていく悠太の葛藤と成長の物語。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 レポートで差別問題について書いたことをきっかけに、この本を読んでみようと思いました。吃音症というものがある事や障がいを持っている人の気持ちを、この本を通して初めて知ることができました。もっと沢山の人に、障がいについて知ってもらえたらいいと思います。

(鳴海柚来)

汐見夏衛 『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』 (スターツ出版) 913. 6/シ

- ◆毎日不満でいっぱいな生活をすごす主人公が、ある日突然70年前の戦時中にタイムスリップした。そこで出会った特攻隊員に惹かれていく物語。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 自分とは真反対の性格の彰のイケメンさが、おもしろい。

(西谷樹乃)

重松 清
『きみの友だち』 (新潮社)

913. 6/シ

◆小学5年生の女の子恵美は、事故で左足を失い、松葉杖なしでは歩くことができなくなってしまった。そんな恵美の学校での人間関係を描いた物語。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 事故に遭ってしまったのが友だちのせいだったとしても、絶対に責めてはいけない。友だちの大切さや悩みを語り合ったり、同じ時間を過ごし、思い出や感情を共有する存在が友だちだということに気付かされる素敵な一冊。

(倉井萌由)

重松 清
『青い鳥』 (新潮社)

913. 6/シ

◆いじめの加害者になってしまった生徒、父親の自殺に苦しむ生徒、気持ちを伝えられずに抱え込む生徒―後悔、責任、そして希望。ひとりぼっちの心にそっと寄り添い、本当に大切なことは何かを教えてくれる物語。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 話を読み進めるうちに、様々な人の視点を知ることができ、視野が広がるので、社会に出る前に読んでおいた方が良い。人間的に豊かになれて、自分のためになる。

(佐藤菜七子)

須賀しのぶ
『革命前夜』 (文藝春秋)

913. 6/ス

◆バブル期の日本から東ドイツに音楽留学した青年が出会ったのは、二人の天才だった。個性溢れる才能たちの中、自分の音を求めてあがく中、ある時、教会で啓示のようなバッハに出会う。演奏者は美貌のオルガン奏者。彼女は国家保安省の監視対象だった。日本人音楽家の成長を描く歴史エンターテインメント。この国の人間関係は二つしかない。密告しないか、するかー。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 圧巻の音楽描写もさることながら、まるで自分が冷戦下の東ドイツに実際にいるような感覚に陥るような、現実的で緊張感のある筆致に引き込まれます。巧みな文章に呑み込まれて、読み始めると止まらなくなってしまう。鳥肌必至です。

(勝村梨彩)

住野よる
『君の膵臓をたべたい』 (双葉社)

913. 6/ス

◆ある日高校生の主人公が病院で一冊の文庫本を拾った。それはクラスメイトの女の子が書いた秘密の日記帳だった。その日記に、彼女の余命が膵臓の病気により残り少ないと書かれていた。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 この本は映画化されていて、本を読んだ人が少ないかもしれないけれど、映画と違う感情が芽生える。「愛」は恋愛だけではなく、ひと言で幅広いものを示し、自分の環境や身近な人と照らし合わせて読むと、心が突き動かされる部分があるように感じた。

(若松怜椰)

住野よる
『青くて痛くて脆い』 (KADOKAWA)

913. 6/ス

- ◆主人公の田端楓と、空気が読めない発言ばかりしている秋好寿乃は、二人だけの秘密のサークル「モアイ」を立ち上げる。しかし、秋好が消えたことによってサークルはどんどん成り下がってしまう。そこで田端と親友たちが手を組んで「モアイ奪還計画」を企てる。

【自分が読んだ学年】 中3

【お勧めの点】 住野よるさんの作品は、映画化されている作品もいくつもあり、物語性もすごく素敵です。ヒロとは誰なのかが気になる上、リアルな人間性とリアルな大学生の日常が垣間見えて、すごくおもしろかったです。

(浅田睦季)

瀬尾まいこ
『そして、バトンは渡された』 (文藝春秋)

913. 6/セ

- ◆幼い頃に母親を亡くし、父とも海外赴任を機に別れ、継母を選んだ優子。その後も血のつながらない親の間をリレーされながらも、素敵な出会いをし、愛情を注がれてきた彼女が結婚するのは誰なのか・・・

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 主人公、優子の人間味がおすすめです。両親がかわることが理由で、ひねくれたり誰かを恨むのではなく、ただ受け入れてきたところがすごいと思いました。

(遠藤美月)

- ◆血のつながらない親のもとを転々としてきた高校生・森宮優子は複雑な家庭環境の中、主人公の成長や血のつながらない親子の日常のやり取りが温かい目線で描かれている。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 主人公は意思がしっかりしていて魅力的であり、振り回されながらもその時その時を大事に生きているのいいと思った。

(安岡愛生)

高里椎奈
『うちの執事が言うことには』 (KADOKAWA)

913. 6/タ/1

- ◆日本が誇る名門・鳥丸家の27代目当主となった花穎は、まだ18歳。突然の引退声明とともに旅に出た父の奔放な行動に困惑しつつも、老執事の鳳と過ごす日々を期待して帰国。しかしそこにいたのは大好きな鳳ではなく見知らぬ青年だった。若き当主と新執事、息の合わない不本意コンビが織りなす上流階級ミステリー。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 素直になれない二人が様々な事件を通してすれちがい、どんどん距離が離れていくけれど、花穎がなんとかして事件を解決して、最終的に鳥丸家全員が笑顔になる。花穎が立派な当主になっていく姿に感動する。

(阪本えみり)

太宰 治
『女生徒』 (角川書店)

913. 6/ダ

- ◆思春期にさしかかった少女が、毎日をもの思いにふけながら過ごす。そしてその思春期が「誰にでも一瞬で過ぎる」という結末をもってストーリーは終わる。

【自分が読んだ学年】 小5

【お勧めの点】 当時は読んだ時期が早かったのであまりよく分かりませんでしたが、高校生になってから分かる共感があると思います。

(柳澤千尋)

太宰 治
『斜陽』 (新潮社)

913. 6/ダ

◆華族制度廃止で没落貴族となったかず子が、これからどのように生きていくのかという物語。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 物語全体がかず子の一人称で描かれており、独特の言い回しが沢山ある点。

(三好渚紗)

田辺聖子
『おちくぼ姫』 (角川書店)

913. 6/タ

◆まさに、王朝版「シンデレラ」。貴族の姫でありながら、継母に召使い同然に扱われ、床が一段落ちくぼんだ部屋に住む姫君。ある日現れた自分を愛してくれる貴公子と姫は無事心を通わせ、苦しい境遇を乗り越えていけるのだろうか。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 古典を習い始め、少し当時の様子を知った上で読むと、おもしろい。“おちくぼ物語”という古典も存在するがこちらは砕けた文章で読みやすく、美しい恋愛物語である。

(吉田萌菜)

知念実希人
『優しい死神の飼いかた』 (光文社)

913. 6/チ

◆犬の姿になった死神が、この世に未練の強い人の未練を解決するということで活躍する。たくさんの方の過去にふれ、解決していく中で何事にも無関心だった死神の心にも変化が現れる。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 犬の姿になった死神と出会うと、その人が抱える苦悩から解放されていく。その時の死神とのやり取りに心が温まる。飼い主と犬のやり取りが細かく描写されていて、読みやすかった。

(高田友莉子)

知念実希人
『仮面病棟』 (実業之日本社)

913. 6/チ

◆療養型病院の当直バイトの医師が、ピエロのマスクを被った強盗犯がおこした病院立てこもり事件にまきこまれる医療サスペンス。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 読んでいるだけでハラハラするような描写がいくつもあって読んでいてあきません。是非読んでみて下さい！

(西村那々歌)

知念実希人
『ムゲンのi (上)』 (双葉社)

913. 6/チ/1

◆謎の病「イレス」に罹患してしまった三人の患者を救うために、夢幻の世界へ。魂の分身、「ククル」と共にマブイグミに挑む。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 上と下に分かれているので長期間楽しめます。夢幻の世界という、非現実的な世界での冒険は次から次へと何が起こるかわからず、続きが気になり読書の時間が楽しみになります。

(村上 凜)

- ◆眠りから醒めない謎の病氣。通称イレス。この難病患者を三人も同時に担当することになった主人公の識名愛衣。治療法に悩んでいたが、祖母の助言により、魂の救済〈マブイグミ〉をすれば目覚めさせられると知る。患者の〈無限の世界〉に飛び込み〈うさぎ猫のククル〉と一緒にマブイグミに挑む。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 医療×ミステリー×ファンタジーが含まれたこの本。読み始めたら最後、物語の世界に引き込まれ、彼らが全てをやりきるまで共に『ムゲン』の世界を旅して、結末を見守りたくなります。

(森口真衣)

知念実希人
『誘拐遊戯』 (実業之日本社)

913. 6/チ

- ◆女子中学生誘拐事件で身代金を運ぶ役を担った刑事の上原は、「ゲームマスター」と名乗る犯人の要求に従い、奔走する。しかし、その要求を果たせなかった。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 読んでいてとてもハラハラするのでおすすめです。

(小野江梨)

知念実希人
『硝子の塔の殺人』 (実業之日本社)

913. 6/Chine

- ◆雪深き森で、燦然と輝し、硝子の塔。地上11階、地下1階、唯一無二の美しく巨大な尖塔だ。ミステリを愛する大富豪の呼びかけで、刑事、霊能力者、小説家、料理人など癖のあるゲストたちが招かれた。この館で次々と惨劇が起こる。謎を追うのは一人の名探偵と一人の医師。散りばめられた伏線、読者への挑戦状、そして驚愕のラストが待ち受ける。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 この作品は2022年度本屋大賞にノミネートされた作品で、ミステリ好きは必ず読むべき本です。ページ数が500ページと分厚い作品ですが、一度読むとページをめくる手が止まらないので、最後まで読んだ時の達成感と謎がすべて解き明かされたときの何とも言えない爽快感をぜひ味わって欲しいです。小説家であり、医師でもある知念実希人さんだからこそ書ける作品です。ミステリ好きの人にはもちろん、皆さんに一度は読んで欲しい作品です。

(古川 栞)

辻村深月
『冷たい校舎の時は止まる』 (講談社)

913. 6/ツ/1

- ◆大学受験を控えた高3の冬、雪の中集まった8人の生徒たちは無人の校舎に閉じ込められる。クラスの学級委員達8人以外が見当たらず、学園祭で自殺したクラスメイトの名を、どうしても思い出せないことに気づく。自殺したというクラスメイトがこの状況に関わっているのか、迫る5時53分の恐怖と戦いつつも、過去の闇に立ち向かい、彼らは文化祭で自殺したクラスメイトの名を探し続ける。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 少し話は長いですが、とても面白い本です。不安や悩みを抱えている高校生におすすめです。

(山森美由紀)

辻村深月
『ぼくのメジャースプーン』 (講談社)

913. 6/ツ

◆ぼくらを襲った事件は、テレビのニュースよりもっとずっとどうしようもなく、ひどかった。ある日、学校で起きた陰惨な事件。ぼくの幼なじみ、ふみちゃんはショックのあまり心を閉ざし、言葉を失った。彼女のため、犯人に対してぼくだけにできることがある。チャンスは本当に一度だけ。これはぼくの闘いだ。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 主人公への復讐、恨みを抱えている一方で、ふみちゃんのために頑張るひたむきさに心を打たれた点。

(阪井文香)

辻村深月
『ツナグ』 (新潮社)

913. 6/ツ

◆7年前に行方不明になった婚約者、突然死したアイドル、交通事故で亡くなった親友。一生に一度だけ、死者との再会を叶えてくれる「使者」によって、紡がれる生者と死者の物語。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 死者と会うことで前に進める者や、一生後悔を背負う者など、人それぞれ様々な道を歩んでいきます。自分だったら誰に会うか等考えながら読むと面白いです。

(城 千晃)

辻村深月
『きのうの影踏み』 (KADOKAWA)

913. 6/ツ

◆どうか女の子の霊が現れますように。お婆さんとその子が会えますように。交通事故で亡くした子を待ちわびる母の願いは祈りになった。辻村深月が“怖くて好きなものを全部入れて書いた”という本格怪談集。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 いつもの日常からちょっとしたことで訪れる不思議で少し怖い短編集です。言葉の受け取り方や解釈の仕方で、様々な感想が持てる一冊です。数年後に再読するとまた違う見方ができると思います。

(川島一眞)

辻村深月
『かがみの孤城』 (ポプラ社)

913. 6/ツ/1

◆ある日、不登校の女子中学生の部屋の鏡が光り、鏡の中に異世界が広がっていることに気付く。そこで、数人の中学生に出会い冒険していく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 一気に読みしたくなるほど、物語に引き込まれます。人物の描写がとてもリアルで、最後は鳥肌が止まらなくなるようなとても面白い本です

(古井明咲希)

◆学校で居場所をなくし、閉じこもっていたところの目の前で、ある日、突然部屋の鏡が光り始めた。その先には城のような不思議な建物。そこにはここと似た中学生がいた。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 何度読み直しても新たな発見があり、面白い本です。朝の読書に読んでみてください。

(早川清琉)

- ◆学校で居場所をなくした中学生が同じような境遇の人と出会い、一緒に過ごすミステリー。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 高校生という多感な時期に読むとたくさん共感できる場所があると思います。

(岡田真由子)

辻村深月
『闇祓』 (KADOKAWA)

913. 6/Tsuji

- ◆精神・心が闇の状態にあることから生じる、自分の事情や思いを一方的に相手に押し付け、不快にさせる言動・行為であり、本人が「意図する」「しない」に関わらず、相手が不快に思い相手の尊厳を傷つける、脅威を感じさせることを“闇ハラ”と定義し、日々闇ハラの中で生きる人々を描きつつ、最終章では驚きの結末が待っています。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 よく話題にも上がるハラスメントの中の、その中でも言葉にしぶらい“闇ハラ”というものがテーマで、生きている以上一度は身に覚えがあると思います。自分では善意でも、相手が不快だと感じればハラスメントとなることを改めて実感させられ、自分の行動など見直そうと思える点です。高校生、主婦、社会人、小学生、そして家族の順に、一見中編小説集のように展開されていくので、とても読みやすく、最後に全てが繋がった瞬間がまさに鳥肌モノな点です。第1章、はじめはとても気持ち悪いと思いますが、その気持ち悪さも魅力の一つです。

(濱田 光)

坪田信貴
『人間は9タイプ』 (KADOKAWA)

379. 9/T

- ◆9タイプ診断テストで、あなたや家族の人間タイプが判明します。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 タイプ別の声かけが、人間関係に有効なことがわかる。

(宮口愛梨)

外山滋比古
『思考の整理学』 (筑摩書房)

141. 5/ト

- ◆前半では自分で考えることの大切さ、後半では実際に「考える方法」を、それぞれ筆者の実体験に基づいての明快な解説がついています。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 まず、人に教えてもらうのが当たり前の受け身な自分の姿勢に、はっと気づかされました。筆者の人生経験で得た知見が書かれているので、私には合わないと思う箇所もあるかもしれませんが、興味深い内容が書かれている点がおすすです。

(西口明優奈)

中村 恵
『難民に希望の光を：真の国際人緒方貞子の生き方』 (平凡社) 289. 1/0

- ◆国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) で活躍し、世界中を飛び回りながら世界の平和に尽力した緒方貞子氏の生涯を記した一冊。緒方氏の信念、目標だけでなく国際社会で働く日本人としての姿が綴られている。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 この本は緒方氏の人生を、そばで見てきた作者の視点から記されている。緒方氏が作者に語ったことや国連でのスピーチを通して感じたことが詰まっている本です。

(加藤くらら)

中山七里

『護られなかった者たちへ』（宝島社）

913. 6/ナ

◆仙台市で他殺体が発見された。人から恨まれるとは思えない聖人のような人物で、二人の刑事が真実を求めていく話です。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 かなり現実的な問題が多く、貧困、ヤクザ、いじめなどの問題が出てきます。初めは聖人を殺した犯人が許せなかったが、その犯人も家族がいなかったり、貧困に苦しんでいたり、他に護るものがあつたりして、複雑な感情になります。人とのつながりの尊さや難しさが感じられると思います。

（龍本七美）

風良ゆう

『流浪の月』（東京創元社）

913. 6/Nagi

◆10歳の少女・更紗(さらさ)は、引き取られた伯母の家に帰るのをためらって、雨の中、公園で一人で時間を持て余していた。そこで大学生の文(ふみ)に出会い、更紗の事情を察して文は更紗を自宅に招き入れる。更紗は、文の家で心安らかな時を過ごして初めて自分の居場所を手にし、喜びを実感していた。しかし、2か月後、文は誘拐犯として逮捕され、二人の幸せは一瞬にして終わりを告げる。15年後、恋人・亮と同棲生活を送っていた更紗は、カフェを営む文と偶然の再会を果たす。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 序盤からつづられる更紗の想いはもちろん、終盤につづられる文の想いを讀んだ時、二人の幸せを願わずにはいられない気持ちになりました。二人の物語を通して、善意の違和感や幸せの形、事実と真実の違いなど様々なことに考えさせられる点が新感覚であり、おすすめです。

（津畑桃花）

梨木香歩

『西の魔女が死んだ』（新潮社）

913. 6/ナ

◆中学に進んでまもなく、どうしても学校へ足が向かなくなかった少女・まいは、ひと月余りを西の魔女のもとで過ごした。まいは西の魔女から、魔女修行をうける。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 魔女のお話ではなく、少女まいが少し大人へと成長するお話です。長さも内容も読みやすく、少し心の成長が読者も一緒にできるような気がします。

（森田芽衣）

夏川草介

『神様のカルテ』（小学館）

913. 6/ナ/1

◆医師不足で、僻地医療問題を抱えるとある長野の病院の内科医。地方医療の厳しい現実と向き合いながら、24時間365日体制の激務を仲間の医師と共にこなしていた。そんなある日、大学病院で手遅れと見放された高齢の末期がん患者が彼らのいる病院を訪ねてくる。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 難しい医療小説ではなく、心温まるような優しい物語なので、読みやすい。登場人物も魅力的で面白い。地域医療や終末期医療についても考えさせられる作品。

（中村梨那）

夏目漱石
『ころ』 (新潮社)

913. 6/ナ

- ◆ Kと先生は同じ人を好きになってしまう。Kがお嬢さんのことを好きだと知った先生は、Kを裏切ってお嬢さんと結婚してしまう。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 人は、本当に好きな人がいたら簡単に裏切るのだということがわかった作品。読む年齢によって感じ方が異なりそうだと感じました。面白いので、ぜひたくさんの人に読んでもらいたいです。

(犬丸春緒)

並木伸一郎
『眠れないほどおもしろい世界史「不思議な話」』 (三笠書房) 204/ナ

- ◆ 世界史の教科書や歴史の本に紹介されている誰もが知っている有名な人物や事件に隠された意外な話、驚きの人生ドラマ、とんでもない異説や恐ろしい真実を紹介しています。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 学校の授業では教わらない、世界史にまつわる不思議な逸話をわかりやすく紹介したもので、いつもとは違った歴史の面白さを実感できる点です。また、より世界史の理解を深めることもできます。

(石田莉子)

仁木英之
『ちょうかい：未犯調査室』 (小学館)

913. 6/二/1

- ◆ 東京、吉祥寺の雑居ビル。警察庁の外郭団体、犯罪編纂室。そこに集う面々は「ちょうかい」、すなわち「懲戒免職」レベルの危険な警官たちばかり。そんな彼らの真のミッションは「これから起こる犯罪を未然に防げ」というものだった。しかし、彼らを束ねるのは、時間記憶の持ち主なのに、まさかの鳥頭という最凶キャリア女子だった。

【自分が読んだ学年】 中3

【お勧めの点】 本を読む時、自分も一緒に推理などをしたい方におすすめです。ぜひ、次の展開を予想しながら読んでみてください。

(佐伯すみれ)

額賀 滯
『沖晴くんの涙を殺して』 (双葉社)

913. 6/Nuka

- ◆ 大津波で家族を亡くし、死神と取り引きをした主人公は、生還し、当たり前な感情を大切に思う話。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 感情移入しやすい話で、身近な人に重ね合わせて読み進められる。

(中村美菜)

貫 成人

『ハイデガー：すべてのものに贈られること：存在論』（青灯社）134.96/N

- ◆ハイデガーの言うように、薔薇の花はその理由とも証拠とも無関係に咲いている。それどころか、我々自身の存在にもまた理由や証拠は必要ない。それでは存在とは一体どういうことなのか、それを明らかにしようとしたのがハイデガーの生涯だった。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 難しい内容なので、分からない単語は随時調べながら読むことをおすすめします。死について考えることや、哲学についてネガティブな感情を抱く人も多いと思いますが、死について考えることは生きている証拠です。哲学者で自殺した人が少ないように、物事を冷静に深く考える力はこの世の中を生きる上で必要な力です。皆さんも是非哲学を楽しんで、自分が生きやすくなる考え方を吸収してください。

(直木美璃)

貫井徳郎

『慟哭』（東京創元社）

913.6/又

- ◆連続する幼女誘拐事件の捜査は行き詰まり、窮地に立たされる捜査一課長。若手キャリアの課長をめぐって警察内部に不協和音が生じ、マスコミは彼の私生活をすっぱ抜く。新興宗教や現代の家族愛を題材にした作品。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 私は今までにもミステリー小説を読んできましたが、この小説は初めてもう一度読み返そうと思った作品です。読み終えた時の驚きと喪失感が大きく、叙述トリックものが好きな方にぜひ読んでほしいです。

(角谷綾乃)

東野圭吾

『眠りの森』（講談社）

913.6/ヒ/2

- ◆名門バレエ団の事務所に侵入した男が、所属ダンサーに殺されますが、ダンサーが正当防衛だという根拠や、男が侵入した理由がわからず、捜査は難航。刑事・加賀が解決に向かう物語です。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 東野圭吾の加賀シリーズ第2の事件の物語です。第1の事件『卒業』を読んでから読むとさらに面白いです。加賀と被疑者の親友のダンサーの未緒との関係性に注目してほしいです。

(大友菜央)

東野圭吾

『私が彼を殺した』（講談社）

913.6/ヒ/5

- ◆流行作家・穂高誠が、女流詩人・神林美和子との結婚式当日に毒殺された。容疑者は3人。しかし、3人が皆、「私が彼を殺した」とつぶやく。はたして真相は・・・。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 この小説は、刑事“加賀恭一郎”シリーズの5作目で、最後まで犯人が明かされません。何度も読み返しながら、自分で犯人を考察したり、他の読者の考察を見たりと、最後まで犯人が分からないドキドキ感を感じられて、おもしろかったです。

(武田陽和)

東野圭吾
『白夜行』（集英社）

913. 6/ヒ

◆常に悪の吹き溜まりを生きてきた男と、理知的な顔立ちで男たちを惹きつけて、関わった人間を不幸にしてしまう女の話。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 伏線がすごい点。とにかく次のページに進みたくなる。

(渋谷愛菜)

東野圭吾
『手紙』（文藝春秋）

913. 6/ヒ

◆高校の卒業式の2日前の直貴の元に、獄中の兄から初めての手紙が届く。獄中の兄の平穏な日々とは裏腹に、進学、就職、音楽、恋愛、結婚と直貴がもう少しで幸せをつかもうとするたびに彼の前には「強盗殺人犯の弟」というレッテルが立ちはだかる。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 被害者側の立場で書かれている小説が多い中で、あまりない加害者側の家族の立場になって書かれている作品です。この本は、罪を犯すとどうなるのか、そしてその被害がどこまでも家族にまわりつき、周りの人々を苦しめることになるということを考えさせられた。

(小谷日奈湖)

◆強盗殺人を犯した兄から定期的には送られてくる手紙。最後の手紙で、兄は自分の罪を再度受け入れ、本当の意味で更生し生きることを告げ、そして弟は兄の前で「イマジン」を歌う。この世界が「イマジン」で歌われているような、差別のない世界だとしたらと考える。兄の罪、遺族の悲しみ、家族の苦しみ、兄弟のつながり、多くのことを考えさせられる物語だ。

【自分が読んだ学年】 中3、高2

【お勧めの点】 推理小説であるが、何が正しいかわからない世の中で、差別がない世界の実現は難しいことを考えさせられる。自分に非がなくても、兄弟という点で、理不尽な差別を受けてしまっている人が、この世界には少なからずいて、将来の希望を持ってない人も数多くいる現実について、この本を通して深く考えることができる。

(渡瀬史帆)

東野圭吾
『パラドックス13』（講談社）

913. 6/ヒ

◆13時13分13秒に、街から人が消えた。誰もいなくなった東京に残された13人の男女に次々と災難が襲いかかる。どうしてこの13人であったのか？必死に生き残ろうとする人たちに共通するものとは？

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 内容はSFで、スケールが大きく、災害がリアルに描かれていて、ゾクゾクさせられます。最悪な状況の中で人間の生々しい部分が登場人物から見られて、感情移入することも多くあり、物語の世界に引き込まれると思います。現実問題に関連付くこともあるので、共感できることもあります。SFにあまり興味がない人でも最後まで夢中になって読めるので、ぜひ手に取ってみてください。

(根本 萌)

東野圭吾
『虚像の道化師』 (文藝春秋)

913. 6/ヒ/7

◆天才物理学者の湯川が様々な事件を解決していきます。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 七つも違う話が入っているので読んでいても全く飽きません。
「偽装う」という話がとくに予想がつかないお話です。

(鈴木 葉)

東野圭吾
『祈りの幕が下りる時』 (講談社)

913. 6/ヒ

◆あるアパートで女性の遺体が見つかり、その調査をきっかけに主人公の加賀恭一郎の母親の謎が明らかになっていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 人間関係が意外な所でつながっていて、面白かった。登場人物の辛い過去も描かれていて、人生の悲しさがよく表現されています。

(竹下美希)

東野圭吾
『疾風ロンド』 (実業之日本社)

913. 6/ヒ

◆内密に作られた危険な生物兵器を盗んだ犯人は、脅迫メールと「生物兵器を埋めた雪山の写真」を送るが、事故死してしまう。スキー場の職員を巻き込み、なんとか回収しようとするが・・・。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 2部にわたるこの作品は、思いもよらないタネと仕掛けでいっぱいです。私が大好きな「どんでん返し」があり、最後には思いもよらない犯人があぶり出されます。ぜひ読んでみてください。

(尾上絵梨奈)

東野圭吾
『人魚の眠る家』 (幻冬舎)

913. 6/ヒ

◆播磨和昌と薫子の夫婦間では、娘の小学校受験が終わったら離婚しようとしていた。しかし、娘の瑞穂がプールで溺れ、脳死状態であることが医師から告げられる。和昌は最先端技術を使った驚く方法で、娘との生活を続けていこうとする。その決断が家族の運命を徐々に狂わしていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 「脳死」をどう捉えるか。普段の生活ではあまり考える機会のない人の死について考えるきっかけとなります。正しい選択を模索する中での苦悩や葛藤する姿には、心を打たれます。

(法貴莉子)

◆離婚寸前であった夫婦が、水の事故により脳死と判断された娘と、その「死」とどう向き合うかについて描いた家族の物語。娘が意識を取り戻すことを信じるあまり、母が機械によって体を動かすことができるようにするが、狂気じみたようにも思える。瑞穂(娘)を取り巻く人たちの視点からも書かれている。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 脳死とは「人の死」なのかを考えさせられる。もし、自分や家族がこうなった時、臓器提供をするのか、など考えずにはいられないと思った。娘はまだ目を覚ますと信じている母に自然と感情移入できるが、弟の存在や、瑞穂の周りがどんどん変わっていくところがおもしろかった。また、プロローグとエピローグとのつながりにも注目して読んでみてください。

(高野華乃)

福岡伸一

『生物と無生物のあいだ』（講談社）

460. 4/フ

◆「生物の授業の復習＋ α^{10} 」です。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 知っている話も知らない話も、きっと両方出てきて、飽きずに読めると思います。福岡さんのエピソードや語りも面白いです。

(溝端一葉)

ブレイディみかこ

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）376. 333/ブ

◆作者の息子のイギリスでの生活に関するノンフィクション。人種差別や貧困など様々な問題に出会います。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 普段、耳にすることのないイギリスが抱える色々な事情や価値観がわかります。

(小泉晴菜)

◆人種も貧富の差もごちゃまぜのイギリスで、元底辺中学校に通い始めた「ぼく」。ぼくと母ちゃんは、共に悩み、毎日乗り越えていく感動のストーリー。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 親子の成長記録を読むことによって、イギリス社会の現実を日本の私たちに報告しながら、警告を発している点がおすすです。

(松井紗香)

◆アイルランド人の父と日本人の母を持つ「ぼく」が過ごす中学校生活1年半を綴りながら、世界の社会問題を問う。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 人種差別や貧困問題、文化の違いなどを深く考えさせられました。

(辻 絵梨奈)

◆アイルランド人の父と日本人の母を持つ「ぼく」が過ごす、英国・ブライトンでの中学校生活の最初の1年半を綴りながら、母である著者が、英国だけでなく世界にはびこる社会問題を問う作品。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 「多様性」という言葉をよく耳にするようになった今、本当に多様性を理解していますか。「多様性は無知を減らす」。著者のこの言葉は、多様性が重視される現代を生きる私に、多様性の理解を促してくれました。これから様々なところで多様性を感じ、多様性により問題に直面するかもしれないです。だからこそ、みなさんにこの本を読んでもらいたいです。

(藤井愛弓)

星 新一

『ボッコちゃん』（新潮社）

913. 6/ホ

◆作品の中の『妖精』は、女の子の前に妖精が現れ、彼女の願いを叶えてくれるがそれには条件がある。それは自分のライバルにその二倍のものが与えられるというものです。女の子は欲しいものを得るのか、手放すのか。どの話にも星新一らしいオチが待っています。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 短い話がたくさん入っているので、読書があまり好きではない人にも読んでもらいやすい本だと思います。予想だにしない結末が読みたい人、ミステリー、SF、ファンタジーなど多ジャンルを一冊で読みたい人におすすめします。

(吉住璃音)

万城目 学

『鴨川ホルモー』 (角川書店)

913. 6/Maki

◆2浪して京都大学へ入学した主人公・安倍は、葵祭のエキストラのバイトの帰りに「京大青竜会」というサークルの勧誘を受ける。当初はただのリクリエーションサークルと思われた青竜会だったが、やがて安倍たちは、自分たちが京都を舞台に「オニ」を使役して戦う謎の競技「ホルモー」で戦うために集められたことを知る。

【自分が読んだ学年】 小学4年

【お勧めの点】 映画にもなった、万城目学先生の第1作目。京都、青春、そして陰陽道といった要素がちりばめられている。コミカルな作風で笑い、最後、安倍の気付いた「ホルモー」の真実でぞっとする作品です。スピンオフの『ホルモー六景』もあわせてどうぞ。基本的に登場する人、ものの多くに元ネタがあるので、それに気づけるとさらに楽しめます。マンガにもなっています。

(藤本優生)

まさきとしか

『あの日、君は何をした』 (小学館)

913. 6/マ/1

◆北関東の前林市で、平凡な主婦として幸せに暮らしていた水野いづみの生活は、息子の犬樹が、連続殺人事件の容疑者に間違われて事故死したことによって一変する。深夜に家を抜け出し、自転車に乗っていた犬樹は何をしようとしていたのか。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 二つの事件がどんな風に関わっているのかが、物語が進んでいくにつれて徐々に明らかになります。また、展開が早く、読み終わった時にタイトルの意味が分かり、とても読み応えがある作品です。

(小西瑞佳)

松岡圭祐

『高校事変』 (KADOKAWA)

913. 6/マ

◆死刑になった人の娘が通う高校に、総理大臣が来て、そこでテロが起こる大変な話。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 リアルで、ハラハラドキドキするところと、逃げる中で友情が芽生え感動する。

(小山璃紗)

三秋 縋

『三日間の幸福』 (KADOKAWA)

913. 6/ミ

◆金欠のクスノキは、偶然聞いた「寿命を買い取ってくれる店」に立ち寄り、短すぎる余命と今後、人生にいいことは起こらないという事実を知る。クスノキは寿命の大半を売り払い、わずかな余生を楽しく過ごそうとする。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 「寿命を売る」という点で現実からかけ離れていますが、読んでいたらフィクションと忘れるくらい自分自身と照らし合わせて読むことができます。誰もがいつ死ぬか分からない人生、日々を大切に生きようと思わせてくれます。

(河口仁菜)

三浦綾子
『氷点』 (角川書店)

913. 6/ミ/1

- ◆二人の子どもに恵まれ、幸せな生活を送っていた辻口啓造と夏枝。ある日、娘のルリ子が殺害されてしまう。娘を失った悲しみが消えぬ中、啓造は陽子という養子を辻口家に迎える。それまでふさぎ込んでいた夏枝は、陽子を実の娘のように育て始めることで、次第に悲しみから解放されていくが…。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 登場人物のそれぞれの人間模様がとても面白いです。とても衝撃的なお話ですが、読み入ってしまう不朽の名作です。

(奥野花那子)

- ◆とある医院の院長一家の幼い長女が殺される。娘を亡くした父親は、彼女が殺された時、不倫をしていたのではと疑っている妻に復讐を思いつく。それによって家族の均衡が崩れていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 続きが気になってしまう本。自分の出生によって罪の意識を感じてしまう少女に感情移入する。気高い少女の清らかな内面と、とりまく両親や兄の心情とのギャップが面白い。

(佐茂千晶)

三浦しをん
『風が強く吹いている』 (新潮社)

913. 6/ミ

- ◆「箱根駅伝を走りたい」という灰二の想いが、天才ランナー・走と出会い、動き出す。10人の個性あふれるメンバーが、長距離を走ることに夢中で突き進む。自分の限界に挑戦し、ゴールを目指して、たすきを繋ぐことで仲間とつながっていく。

【自分が読んだ学年】 中2

【お勧めの点】 一人ひとりが孤独に自分を見つめながらも、自分と戦い続け、お互いの絆を深めることができ、また、努力は決して無駄にはならないと思わせてくれる一冊です。

(佐伯莉香)

三島由紀夫
『お嬢さん』 (角川書店)

913. 6/ミ

- ◆女子大生の「お嬢さん」は、クールな性格であると自負していた。しかし、結婚を通して普通の女の子と同様に嫉妬心などを知り、「奥さん」として成長していくお話。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 文豪の作品というと、文語体でよく意味が分からないというイメージがあるかもしれませんが、この作品はとても読みやすいです。登場人物の性格や人間関係は素直に面白く、ずっと見守っていたいお嬢さんです。

(武井裕香)

水野敬也
『夢をかなえるゾウ』 (飛鳥新社)

913. 6/ミ

- ◆今ひとつ力を発揮できない会社員が、夢をかなえるためのスキルを伝授され、習得していく。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 ゾウの神様のガネーシャの課題を自分も実践しようと思える内容で、おもしろいです。「夢をかなえるゾウ」が、今までの考え方や意識を変えてくれます。

(中川真那)

湊 かなえ
『告白』 (双葉社)

913. 6/ミ

- ◆「愛美は死にました。しかし、事故ではありません。このクラスの生徒に殺されたのです」。我が子を校内で亡くした女性教師による、HRでの告白から物語が始まる。一つの事件をモノログ形式で「級友」「犯人」「犯人の家族」からそれぞれ語らせ、真相に迫る。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 徐々に紐解かれていく伏線回収、飽きない物語の展開に引き込まれます。

(貴田萌花)

- ◆我が子を校内で亡くした中学校の女性教師によるホームルームでの告白から、展開される物語。少しずつ事件の全貌が明らかになっていく。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 被害者遺族による正直な気持ちを、現実味を感じさせながら表した痛快なストーリー展開が、おもしろいです。

(緒方愛珠)

- ◆ある中学校の学年末の終業式。1年B組の担任を務める女性教師が、37人の生徒を前に衝撃的な告白を始める。彼女の娘は亡くなっており、警察は事故死と判断した。しかし、このクラスの生徒が娘を殺したのだというのだった。

【自分が読んだ学年】

【お勧めの点】 最後が怖いからおすすめ。

(八木花瑚)

- ◆我が子を校内で亡くした女性教師が、終業式のHRで犯人である少年を指し示します。一つの事件をモノログ形式で「級友」「犯人」「犯人の家族」からそれぞれ語らせ、真相に迫る物語です。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 ミステリー作品で、話は重たいですが、毎話とても惹きつけられます。たくさんの伏線が張られていて、読むのが止められない程、面白い作品です。

(武田京子)

湊 かなえ
『Nのために』 (双葉社)

913. 6/Mina

- ◆物語の主要登場人物たちは全員イニシャルが「N」であり、現在と過去を交錯させながら、ある殺人事件の真相を軸に、各人物たちが抱える愛の物語を明らかにしていく「純愛ミステリー」。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 殺人事件から始まり、登場人物の過去が繋がって、事件の真相が明らかになったときに意外だったから。

(北村彩華)

湊 かなえ
『母性』 (新潮社)

913. 6/Mina

- ◆母に愛されたかったある女子高生の転落死の真相を、彼女自身と彼女の母親の食い違う回想を交えながら描く。

【自分が読んだ学年】

【お勧めの点】 今年、『母性』の映画版が公開されるので、とても注目されている作品だと思います。普段感じる事のない母側からの視点もおもしろいです。

(藤井小百合)

- ◆女子高生が自宅の中庭で倒れているのが発見された。母親は言葉を詰まらせる。「愛能限り、大切に育ててきた娘がこんなことになるなんて」。11年前の台風の日、彼女たちの幸福は突如奪い去られていた。母の手記と娘の回想が交錯し、浮かぶ真相。これは事故か事件か。新しい母と娘の物語。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 先が予想できなくて面白い。今までにない終わり方。ミステリー好きな人におすすめ。

(安 紗花)

- ◆女子高生が自宅の中庭で倒れているのが発見された。母親は言葉を詰まらせる。「愛能限り、大切に育ててきた娘がこんなことになるなんて」。母の手記と娘の回想から浮かび上がる真相。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 母性とは、人それぞれであり、それがあからいって必ず子どもが幸せであるわけではないということをこの本から学び、母親から愛されて育つことは当たり前ではなく、改めて自分の母親に感謝することが大切と思えた点。

(塚本すみれ)

湊 かなえ 『高校入試』 (KADOKAWA)

913. 6/ミ

- ◆何者かからの入学試験妨害の宣言。翻弄される教師、保護者からの糾弾、受験者たちの疑心。一体、犯人は誰？

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 夢中で読めるので、ページ数の割には早く読み終わられる。リフレッシュしたいときにおすすめ。

(齋藤 響)

湊 かなえ 『ブロードキャスト』 (KADOKAWA)

913. 6/ミ

- ◆町田圭祐は中学時代、陸上部に所属し、駅伝で全国大会を目指していたが、3年生のとき、わずかの差で出場を逃してしまう。高校になり、なんとなく放送部に入り、面白さに目覚めていく。しかし、部内で対立が起こってしまい、圭祐にとって夢は一つじゃないことに気づき、新しい夢へと進んでいく。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 仲間と協力することの大切さに気付かされ、部活をしている人にはもちろん、分かり合えるお話だと思います。ぜひ、読んでみてください。

(渡瀬未帆)

宮下奈都 『羊と鋼の森』 (文藝春秋)

913. 6/ミ

- ◆北海道の田舎で育った外村は、高校でピアノの調律師・板鳥と出会う。板鳥が調律したピアノの音に「森の匂い」を感じ、調律師の仕事に魅せられた外村は調律の世界で生きていくことを決意する。やがて外村は、板鳥の楽器店で調律師として働くようになり・・・。

【自分が読んだ学年】 中3

【お勧めの点】 将来の道を見つけられずにいた外村という主人公が、偶然出会う調律師のおかげで夢を持つことができます。人生の岐路に日々立っている高校生にとって、大きな希望や勇気を与えてくれる作品だと思います。また、美しい情景が目につかぶ瑞々しい文章で書かれており、心を穏やかにさせてくれます。音楽に興味がある方もない方も読んでいただきたい作品です。

(上野央楽)

村上春樹
『カンガルー日和』 (講談社)

913. 6/ム

- ◆短めの小説が18作入っています。メルヘンチックで繊細なハルキ・ワールドが楽しめる作品です。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 悲しくなったり、ワクワクしたり、恐怖を感じたり、いろいろな感情が生まれます。一つの話が10分程で読めるので、朝読書におすすめです。

(榊村千紘)

茂木健一郎
『脳と創造性：「この私」というクオリアへ』 (PHP研究所) 所蔵なし

- ◆「創造性」とは何かという問いから始まり、創造性の本質に迫っていく。「創造性」は天才のものと決めつける固定観念が立ち上がる中、ダイナミックでカオスな「生の現場」に切り込み、脳と創造性の秘密を探っていく。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 創造することは、生きることそれ自体が創造的なものだから、遠ざけてしまうのではなくむしろ、自分に備わっているものと自覚的になるべきである。今まで考えたこともなかった観点を与えてくれる一冊です。小難しい内容を扱っているのに、わかりやすく説明してくれているため、自分たちの思考の仕組みが気になる人はぜひ手に取ってください。

(古野佐和夏)

森 絵都
『カラフル』 (文藝春秋)

913. 6/モ

- ◆死んだはずのぼくの魂が天使に行く手を遮られた。抽選に当選し、もう二度と生まれ変わることができなかった魂だが、再挑戦のチャンスが与えられたという。ホームステイ先は小林真。自殺を図った彼に一体何が起こっていたのか。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 まず、設定が独特で面白いです。物語の最後で題名の意味が分かっすっきりします。人間関係で悩み事がある人におすすめです。

(丸山向日葵)

- ◆生前の過ちにより、輪廻のサイクルから外れたぼくの魂。しかし、天使業界の抽選に当たり、もう一度チャンスをもらう。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 いい加減な天使により与えられたチャンスに、今まで見えていなかったことに気づかされ、生きづらさを感じていた景色がまったく違ったことに心を救われる。

(奥谷芽依)

- ◆大きな過ちを犯して死んだ魂は、天使によって再挑戦が与えられる。その再挑戦は下界の誰かの体を借りて、犯した過ちを自覚したら終了する。主人公は二度目の人生で表面だけ、あたたかい家族と暮らしていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 冒頭から引き込まれるところ。荒っぽい言葉遣いと例え表現、他人の人生を自分の人生として体験するところ。

(舌古和奏)

森 博嗣

『すべてがFになる』 (講談社)

913. 6/モ

- ◆ 孤島のハイテク研究所で、少女時代から完全に隔離された生活を送る天才工学博士・真賀田四季。彼女の部屋からウェディングドレスをまとい両手両足を切断された遺体が現れた。偶然、島を訪れていたN大助教授・犀川創平と学生・西之園萌絵が、この不可思議な密室殺人に挑む。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 パソコン等の最新技術を生かしたトリックにあつと言われます。事件の結末も想像とはかけ離れたもので、すべての真相を知るのがすごく気になってページをめくるのが止まりません。

(大中彩愛)

森見登美彦

『四畳半神話大系』 (角川書店)

913. 6/モ

- ◆ 京都大学3回生の男子生徒が、1回生で選んだサークルによって、自分の大学生活をいかに変えていったかその可能性を描いた小説。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 一話ごとに違った世界観でも、所々同じ文章が出てきて楽しい。

(吉田七都)

山田真琴

『星上のテロリスト』 (光宝平成社)

所蔵なし

- ◆ 宗教にはまり、宇宙を志すようになった山田が、夢の中で星に上陸し、そこには宇宙人がいて、テロが起こるが…。

【自分が読んだ学年】

【お勧めの点】 最初の方は夢を見る少年だったが、最後も夢の中で終わる、もやっとするところがおすすめです。

(原田光理)

山田詠美

『ぼくは勉強ができない』 (新潮社)

913. 6/ヤ

- ◆ 「僕は確かに成績が悪いよ。でも、勉強よりも素敵で大切なことがいっぱいあると思うんだ。」主人公・時田秀美は、17歳の高校生。大学には進学しないと決め、勉強を放ったらかし、色恋にうつつを抜かす。だが、偏った価値観や常識に一人立ち向かっている。秀美が在りたいと思う姿、周りの大人たち、友人との挟間で、悩みもがく姿を描いた青春小説。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 秀美くんの凛としたカッコ良さに惹かれる。自分の持っているもので、驕らないし、内省できる所が素敵。十代の閉鎖された世界をどう観て、どう生きるか。秀美くんの悩みは、普遍的に存在しているが、私たちが見過ごしていた大切なことを教えてくれる。短編に分かれていて読みやすく、どの台詞も説得力があり、自分の教訓になっている。「勉強」になる一冊。

(安藤智紗)

山田悠介
『親指さがし』（幻冬舎）

913. 6/ヤ

- ◆「親指さがしって知ってる？」由美が聞きつけてきた噂話をもとに、武たち5人の小学生が遊び半分で始めたデスゲーム。しかし、終了後、そこに由美の姿はなかった。それから7年、過去を清算するため、事件の真相を求めるため、再び「親指さがし」を行うが・・・。

【自分が読んだ学年】 中2

【お勧めの点】 山田悠介さんはホラーやミステリーを中心にした作品が多く、文体は分かりやすくエンターテインメント性の強い作風です。読み始めると一気に読みしてしまう、独特な世界観があるのでおすすめです。

(成富由伊)

雪乃紗衣
『彩雲国物語』（角川書店）

913. 6/ユ/1

- ◆主人公の秀麗が臨時の妃として後宮に入る。平穏な日々の裏で一体何が。

【自分が読んだ学年】 中1

【お勧めの点】 後宮の物語は好きだけど、デジャヴになってきた人におすすめです。伏線がすごいで、2回目を読みたくなります。

(本田紫苑)

吉月 生
『過去で君が待っている。』（KADOKAWA）

所蔵なし

- ◆6年前、僕は、愛する人を永遠に失った。それ以来、喪失感を抱えて生きてきた僕。死ぬ直前、突然に別れを切り出して去った彼女の行動が、今もずっと心に引っかかっていた。「もしあの時、無理やりにでも彼女を引き留めていたなら、二人の未来は違った？」そんな過去の後悔を引きずる僕にある日、18歳の失敗をもう一度やり直すチャンスが訪れて・・・。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 結末に驚くところ。

(櫻井優羽花)

吉野源三郎
『君たちはどう生きるか』（マガジンハウス）

159. 5/Y

- ◆中学生のコペル君に伝えたいことを、叔父さんがノートに綴っていく。そのノートから、コペル君は自分が世の中の構成員の一人に過ぎない、分子のようなものだと思ひ、そこから人間同士の関わりなど様々なことを学び、成長していく過程が描かれている。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 読み進めていくうちに自分がコペル君になったような気持ちになり、叔父さんの教えてくれる考え一つひとつに新鮮さを感じて、もっと知りたいと思う。人生における教訓のようなものが詰まっていて、一度は読んでおきたい本。

(王 珠梨)

L. M. オルコット著／吉田勝江訳
『若草物語』（角川書店）

933. 6/オ

◆しっかり者の長女メグ、活発で信念を曲げない作家志望の次女ジョー、内気で繊細な三女ベス、人懐っこく頑固な末っ子エイミー。南北戦争時代に力強く生きるマーチ家の四姉妹が織り成す物語。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 どんな困難が待ち構えていようとも、屈することなく乗り越えていく姿に憧れる。

(福味千穂)

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著／三浦みどり訳
『戦争は女の顔をしていない』（岩波書店）

986/ア

◆第二次世界大戦中に従軍したソ連の女性たちの体験談。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 戦時中に従軍したソ連の女性たちの体験談がたくさん集められており、当時（第二次世界大戦中の）女性たちの様子がよくわかる。

(福田百花)

ソフィー・オドゥワン＝マミコニアン著／山本知子訳
『タラ・ダンカン』（KADOKAWA）

953. 8/A

◆祖母と共に暮らす普通の女の子のタラ。ある日、突然、自分に魔法の力があることがわかり、惑星・オートルモンドに行くことに・・・。

【自分が読んだ学年】 小学5年

【お勧めの点】 フランス版ハリー・ポッターのような感じ。話が進むにつれて、「ええ?!そんなことが?!」という展開が増えてくる。

(金田真弥)

フランシス・ホジソン・バーネット著／羽田詩津子訳
『秘密の花園』（岩波書店）

080. 9/イ/124

◆インドで両親を亡くしたメアリは、引き取られ先のイギリスである少年と出会いー。

【自分が読んだ学年】 小学5年

【お勧めの点】 小学生から大人まで、いつ読んでも何度読んでも引き込まれます。本の中の風景が、脳裏に浮かんでくる程、美しい言葉の表現も楽しめる魅力の多い作品です。

(宇井 藤)

カポーティ著／村上春樹訳
『ティファニーで朝食を』（新潮社）

933. 7/カ

◆新人女優のホリー・ゴライトリーと同じアパートに越してきた自称作家のポール・バージャックの物語。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 ニューヨークの雰囲気が伝わってきます。映画にもなっているので、小説と映画の両方を見てみても良いと思います。

(立石優羽)

チヨ・ナムジュ著／斎藤真理子訳
『82年生まれ、キム・ジョン』（筑摩書房）

929.13/C

- ◆結婚、出産を機に仕事を辞め、育児と家事に追われるジョンは、最近、まるで他人が乗り移ったような言動をとることがあった。ある日、すでに亡くなっている夫と共通の友人になり、またある日は夫の実家で自身の母親になり、文句を言う。そんな彼女を心配する夫が、彼女を傷つけるのが怖く、一人精神科医に相談に行った。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 子供時代、少女時代、大人になった今になるまでに女性であったから通ってきた困難な道、社会から切り離されていくような気持ちを抱える日々など、女性なら誰もが感じたことがあるような場面を積み重ねるジョンの人生が描かれていて、一緒に絶望したり、そんな彼女を応援したりしたくなるような作品です。

(井上ひなた)

スティーブン・R・コヴィー著／フランクリン・コヴィー・ジャパン訳
『完訳7つの習慣：人格主義の回復』（キングベアー出版）159/C

- ◆『7つの習慣—成功には原則があった！』を読みやすくした新版だ。人格を磨くための基本的な原則を具体的に形にしたものが「7つの習慣」だ。解釈は各個人によると思うので、ここでは詳細を書かない。

【自分が読んだ学年】 小学6年から中1

【お勧めの点】 自己啓発に関する書籍というと少し怪しさを感じる人もいるかもしれない。しかし、私は「自己啓発」の本を読んだからといって、その通りに生きなくて良いと思う。むしろ、引き出しの一つとして、何か行き詰った時、進路を見失った時に思い出すくらいで良いだろう。ただ、この本は時間が経てば経つほど、解釈によって本来の意味を誤って捉えてしまう可能性があると思う。定期的に読み直してほしい一冊だ。

(曾我美咲)

アンドレス・ダンサ、エルネスト・トゥルボヴィッツ著／大橋美帆訳
『ホセ・ムヒカ：世界でいちばん貧しい大統領』（KADOKAWA）289.3/ム

- ◆世界が抱える諸問題の根源は、我々の生き方そのものにあると説いた伝統的スピーチで、一躍時の人となった南米ウルグアイ前大統領ホセ・ムヒカ。一国の長でありながら、庶民的生活を貫き、国民の目線に立ち続ける柔和で読書好きな老人の生涯は、貧困、ゲリラ活動、投獄など衝撃の過去に満ちていた。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 ホセ・ムヒカの白黒つけず、現実を見てその時々でベターな選択をする姿勢や、答えの出ないことを考え、考え、考え抜くことをライフワークとしているところなど、人として尊敬する部分が多く、勇気づけられることが多々あった。どのように生きていきたいか考えるきっかけになった。

(大歳花奈)

フィリップ・K・ディック著／浅倉久志訳
『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』（早川書房）933.7/デ

- ◆第三次世界大戦後の未来を舞台にした小説です。主人公は、火星から逃亡してきたアンドロイドを「処理」する仕事をしています。彼は、物語の途中であまりに人間らしい人造人間と出会ったため、人とアンドロイドとの区別を次第に付けられなくなっていきます。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 世界観が独特で、難しいため、初めは読むのに苦労するかもしれませんが、それに慣れるとどんどん作品に引き込まれていきます。特に、作中に出てくるオリジナルの機械についての描写が素晴らしいです。また、主人公が感情豊かなので、感情移入がしやすいと思います。ぜひ、一度見かけたら読んでください。

(阿部花音)

ミヒヤエル・エンデ作／大島かおり訳
『モモ』（岩波書店）

080. 9/イ/127

- ◆ある日、街に現れた少女モモ。街の人々とモモは友情を育みますが、それを邪魔する「時間どろぼう」が現れます。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 読んだことがない人はもちろん、すでに読んだことのある人にもおすすめします。この本は、読み返す度に新しい発見があります。読了後に温かい気持ちになると思います。

（奥村 栞）

- ◆町はずれの円形劇場跡に迷い込んだ不思議な少女モモ。町の人たちはモモに話を聞いてもらおうと幸福な気持ちになるのです。そこへ、「時間どろぼう」の男たちの魔の手が忍び寄ります。「時間」とは何かを問う、エンデの名作。

【自分が読んだ学年】 小学3年

【お勧めの点】 世界観は、現実世界と一線を画した昔のギリシャのような印象を受け、肩に力を入れて読む必要がない本ですが、主題は現実世界の人間の抱える悩みと共通するところがあるのでおすすめです。

（山本理恵子）

ヴィクトール・フランクル著／霜山徳爾訳
『夜と霧』（みすず書房）

946/F

- ◆ナチスの強制収容所での自らの体験を、心理学の視点から考察したもの。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 一般に知られているアウシュヴィッツとは、また違った強制収容所での悲惨な状況を隠すことなく告白している点。

（井内明依）

ハ・ワン文・イラスト／岡崎暢子訳

『あやうく一生懸命生きるところだった』（スターツ出版）159/K

- ◆他人の目を気にせず、自分らしく、頑張らずに生きることを決意した著者が贈る、生きづらさを手放すための言葉が書かれている。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 生きる勇気をもらえるエッセイ本。この本では、生きていく上で皆一度は抱いたことがあるような問いが度々投げかけられている。毎日、走り続け、疲れ切った人はこの本を読んで少しでも楽になってほしい、そう思えるエッセイ本です。

（香月伶美）

カフカ作／山下肇，山下萬里訳

『変身；断食芸人』より『断食芸人』（岩波書店）

943. 7/カ

- ◆檻の中で断食を続ける断食芸人が、一時は断食芸によって脚光を浴びるものの、やがて観衆に見捨てられ、サーカスに入った後、かつてから望んでいた制限日数を設けない断食を行い、餓死する。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 この断食芸人は最期、「自分に合った食べものを見つけることができなかった」と言って息絶えます。この言葉の後には、「断食せずにはいられなかった。自分に合った食べものさえあれば皆と同じように食べていただろう。」と告げ、この発信は現在「自分に合う生き方が分からない」と悩んでいる人々に通じるところがあると思います。

（酒井悠乃）

キム・スヒョン著／吉川南訳
『私は私のままで生きることにした』（ワニブックス） 159/K

- ◆自分が幸せに過ごせることを大切にしようという内容の自己啓発本。
【自分が読んだ学年】 高1
【お勧めの点】 イラストが可愛く、言葉遣いも優しい、背中を押してくれる本です。
(岡本歩実)

- ◆誰の真似もせず、誰もうらやまず、自分を愛することの大切さを伝える。
【自分が読んだ学年】 高2
【お勧めの点】 一人ひとりの生き方、価値観を認め、共に生きることを学べる点。
(大江柊葉)

アンドレイ・クルコフ著／沼野恭子訳
『ペンギンの憂鬱』（新潮社） 983/K

- ◆売れない小説家、ヴィクトルとペンギンの話。ヴィクトルは生活のため、政治家や軍人などの「追悼記事」をあらかじめ書く仕事を始めるが、その大物たちが次々に死んでいく。不可解な出来事と目に見えない恐怖が日常生活を脅かし始める。
【自分が読んだ学年】 高3
【お勧めの点】 不気味で不条理なものを日常生活の味気ない描写にさりげなく紛れ込ませながらも、続きを読まずにはいられない面白さがある。
(谷野真優)

グレッグ・マキューン著／高橋璃子訳
『エッセンシャル思考：最少の時間で成果を最大にする』（かんき出版） 336.2/M

- ◆エッセンシャル思考とは、私たちの抱えるタスクのうち90%はどうでもよいものであり、本当に重要な10%に集中するという思考法です。そのやり方が先人の残した言葉と共に、分かりやすく解説されている。
【自分が読んだ学年】 高3
【お勧めの点】 自分の時間とエネルギーを最も効果的に配分することで、重要な仕事で最大の成果を上げることができる点。
(三浦菜子)

ティム・オブライエン著／村上春樹訳
『本当の戦争の話をしよう』（文藝春秋） 933.7/オ

- ◆ヴェトナム戦争に従軍したオブライエンの書く、「戦争」を抱えた人の心と狂気の短編集。兵役から逃げようとする男が、“カナタ”に向かう『レイニー河で』等22篇。
【自分が読んだ学年】 高1
【お勧めの点】 アメリカが徴兵制を用いていたことは知っているだろうか。オブライエンは、その徴兵によって従軍した。本当の戦争とは、まったく教訓的でない。反戦メッセージがまったく込められていないこの本では、「自分で」戦争を考えることができる。
(田村陽菜)

ケネス・ローマン著／山内あゆ子訳

『デイヴィッド・オグルヴィ：広告を変えた男』（海と月社）289.3/0

- ◆ 広告史に残るキャンペーンを次々と繰り出し、「世界でもっとも著名な広告人」となった男の強烈な才能と成功の秘密、そして意外な素顔に迫った渾身の一冊。

【自分が読んだ学年】 高3

【お勧めの点】 広告に興味がある人に読んでほしいです。広告に対する考えやマーケティングについて改めて認識させられます。一人の才能ある人の伝記としても、とても面白いです。

(松岡美祐)

J. K. ローリング作／松岡佑子訳

『ハリー・ポッター』（静山社）

933.7/口/1-1

- ◆ 赤ん坊の頃に両親を亡くし、親戚の一家に冷遇されて孤独な日々を過ごしてきた少年ハリー・ポッターは、11歳の誕生日に自分が魔法使いであることを知らされる。ホグワーツ魔法学校へ入学し、今まで自分が知らなかった魔法界に触れ、亡き両親の知人をはじめとした多くの人々との出会いを通じて成長する。

【自分が読んだ学年】 小学6年～中1

【お勧めの点】 私は小学生から中学生の間くらいに読んだが、高校になってから読んでも面白いと思う。長編なので、一気に読もうと思うと、少し気が滅入ってしまうかもしれないが、勉強の息抜きに少しずつ読んでいくのがいいと思う。海外作品なので、原作の英文にチャレンジしてみたり、映画化もされているため、英語にして、リスニングの入り口として観てみるのもいいと思う。

(角谷美津希)

- ◆ ハリー・ポッターは親をヴォルデモートに殺されます。ハリー・ポッターは仲間と共に、ヴォルデモートを倒すための大冒険をします。

【自分が読んだ学年】 中学

【お勧めの点】 映画を観たことがある人も多いと思うのですが、本で読むのも、自分のペースでしっかり読めておすすめです。『ハリー・ポッター』は唯一何回でも観れる作品だと思いました。ちなみに、『不死鳥の騎士団』が一番好きです！

(土屋実穂)

サン＝テグジュペリ著／河野万里子訳

『星の王子さま』（新潮社）

953.7/サ

- ◆ 砂漠に不時着した主人公と彼方の惑星から来た「ちび王子」の物語。

【自分が読んだ学年】 高2～3

【お勧めの点】 大人を批評することが多い王子ですが、その言葉にとっても説得力があり、思わずドキッとしてしまいます。大人になる手前の時に、初心を思い出させてくれる感慨深い本です。

(中村莉子)

- ◆ 操縦士である「ぼく」は、サハラ砂漠に不時着する。孤独で不安な夜を過ごした翌日、ある小惑星から来た王子である一人の少年に出会う。そんな王子の旅の物語。

【自分が読んだ学年】 高2

【お勧めの点】 星の王子さまは独特な世界観があり、誰でも楽しめるような本です。とても読みやすい本ですが、この本は、著者の友人のユダヤ人のために書かれたものです。当時、ユダヤ人は弾圧されていたこともあり、筆者のメッセージがたくさん込められているのでおすすめです。

(高橋利彩子)

ダレン・シャン作／橋本恵訳
『ダレン・シャン』（小学館）

933. 8/シ/1

◆主人公であるダレン・シャンが毒ぐもにかまれた友人を助けるためにバンパイアになる。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 読みやすい物語ではあるけれど、その一方で、流血表現や友情の崩壊などダークな所。会話などにも名言があり、読みやすい割に物語の奥が深い。高校生で読むことで、前に読んだ時とは別の視点から楽しめる。

(宮野くるみ)

ソン・ウォンピョン著／矢島暁子訳
『アーモンド』（祥伝社）

929. 13/S

◆扁桃体が人より小さく、怒りや恐怖を感じることができない16歳の高校生、ユンジェ。そんな彼は15歳の誕生日に、目の前で祖母と母が通り魔に襲われた時もただ黙って見つめているだけだった。一人ぼっちになったユンジェの前に現れた一人の少年ゴニ。激しい感情を持つゴニとの出会いが、ユンジェの人生を大きく変えていく。

【自分が読んだ学年】 高1

【お勧めの点】 ユンジェがゴニと出会い、過ごしていく中で少しずつ自分の感情に気づき、周りの人と接していく様子が心が温まった。読み進めやすく、本の中の物語が目の前で起こっているような本。

(豊田リリア)

マララ・ユスフザイ、クリスティーナ・ラム著／金原瑞人、西田佳子訳
**『わたしはマララ :
教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』**
(学研パブリッシング) 289. 2/Y

◆パキスタンで、「女性が教育を受ける権利」を主張するマララの手記。

【自分が読んだ学年】 小学5年、高3

【お勧めの点】 この本を通して、パキスタンの内情やそこで暮らす人々の思いをより深く理解できた。また、マララの勇敢な姿にとっても刺激を受けた。

(湯本志築)